



玉子王子 著

一章 パトロールに出た男戦士たちが女戦士に待ち伏せられてキ〇タマ潰しで惨殺

少し高い丘。上のところが広がっているが、そこを木の柵で囲んでいた。

縦の木の間は狭く、数が多く、牢のような感じである。

横木はそれが前後に揺れないように固定するだけらしく、縦の木がメインの障害物らしいことがわかる。

何か、中を行きかう棍棒や弓を背負った男たちのほうが閉じ込められているようにも見えるが、砦なのだ。縦木が妙に多いのは技術がないためである。

行きかう男たちは、毛皮を着ている。

贅沢ではなく、大した布がない技術レベルの社会なのだ。まあ安っぽい布はあるにはあるが、毛皮のほうが強度もあり、暖かく、どう考えても優れている。

それこそ、その布の材料でロープを作っても頼りなくて使えないぐらいである。

横木を固定する物は植物のツタで、金属加工技術がないので釘などもないため強く固定できない。

縦木は、地面に穴を掘って突っ込めば固定できるので、こちらは固くなる。

そのため、縦木メインの柵になっているわけだ。

その木柵の砦の中に、見張り台が建っている。

そこから、一人の男が周りを見回している。毛皮のチョッキに腰巻、足元には棍棒。見るからに原始人。

しかし、原始人ではない。

人間ではない。

A I というか、プログラムのような存在か。

彼は気づいたときには、大人だった。

というか、「子供」という概念は理解しているが、見たことはない。

そういう世界なのだ。

ベテヴォ、という名前があるにはあるが、誰がつけたのかわからない。

誰が、という事もない。ランダムで生成された名前でしかない。

ゲームというか、ある種のシミュレーションの世界である。

ベテヴォはこの世界が作り物で、自分が死んでもまた同じ人間として生き返ってくると知っている。

というかすでに五回やそこらは死と再生を繰り返している——生命力がHPという数字で表され、どんな怪我でも時間さえ経てば治るとか、こまごまとしたシステムの知識は初めから持っている。

持っていたらどう、という事もない。

ただ何となく生き、彼らの国「うさぎ市」の指導者水本の指示を聞いていくだけだ。

そしていつか、彼が天下を取れば、消えるだけの事。

死も痛みも屈辱もできれば避けたいと思うが、その「最後に消える」ことだけは怖くない。

死んでも怪我をしても生き返るが、最後に「消えた」ら完全に終わりだというのに、それだけは気にならない。

ならないように作られているのだろう、とすらベテヴォは思わない。

その辺、考えることすらないように作られていた。

そのベテヴォの見張り台の下に棍棒を背負った男がやってくる。

この世界の人間は水本やサポート役の幼女フォンティーンなど少数の特別な者を除けば二〇歳である。

ベテヴォもその下の男も二〇歳だが、同じ二〇歳でも若く見える者も居れば老けて見える者もいる。下の男、クーメーガは若く見える側だ。見えたから何、という事もないが。

「隊長！ 交代！」

ベテヴォはこの砦の隊長である。

丸木弓兵二〇〇人と、鯨戦士二〇〇人が詰めている砦。

丘の真ん中に小屋を建て、その周りを一重に木の柵で囲んだいい加減なもの。

さらに、外側に溝を掘り、木を外に向くように突き刺して尖らせている。

逆茂木という奴だ。

それらに邪魔され、足を止めている敵を弓で撃つわけだ。

単純な話だが、それで結構な数で攻められてもどうにか防いで来ている。

その間に戦力を回復して、憎きアッカドを倒すのだ、というのが指導者水本の方針らしい。

前の戦いで多くの兵を失ったので、この砦が稼いでくれる時間が国の命運を分けるのだ、という話。

——まあその理屈はわかるけどなあ……こっちが兵隊増やす間に敵も増やすんだぞ？ もう詰んでないか？ いや、外国があるから、都合よくアッカドに他国が攻めて来たりしたらあれだけど……逆にこっちに来たら完全終了だし……

梯子が揺れる。横木を止めるのが木のツルなので危うい。一様止める場所に石斧で切込みを入れて、あっさり下に滑り落ちない用にはしているが、ガッチリの逆の状態で不安である。

まだ横木が外れて転落したものはいない。

それで大怪我してもしばらくすれば治るし、死んでも生き返ってくるのだからいいだろう……という事ではなく、特に解決方がないから仕方ないという話。

——釘もねえとかなんだよこの社会……

実のところ、中で生きる者たちは様々な概念を持ってはいる。釘どころかテレビやインターネットでも知ってはいる、作られた段階である程度個体差のばらつきはあるが、情報として持たされているのだ。

しかしあまり意味がない。

あー、機甲師団があればなー、などと原始時代に考えても全くの無意味なのだ。

見張り台を降りて小屋に向かう。

木の骨組みに屋根は毛皮、壁は泥で作っている。

そこから、数人の男が出てくる。棍棒を肩に担いだ五人、弓を持った五人。暑いためか、腰巻だけだ。毛皮は一樣鎧替わりなのだが、暑苦しいので平時は気を抜いて着ない者も多い。

棍棒は鯨の牙を植え付けたブラジオンと呼ばれるもの。

弓は丸木弓。

丸木弓というのは、単独の木の棒と木のツルで作った弓で、大した威力はない。性質の異なる木を

組み合わせたり、骨や金属を使ったり、絃に動物の筋を使ったりしないと威力は出ない。

しかし原始時代並みの技術しかまだないうさぎ市で作れる弓はしょぼい丸木弓だけだ。

それでも、男たちはそれを大いに頼りにしていた。

「そろそろまた女ども、来るんじゃないかな？」

「いくらでも来いだ！ マ○コにこいつをぶち込んでやるぜ！」

得物を叩く丸木弓兵、名前はノッロロ。

名前は**ランダム生成**なのでベテヴォだのクーメーガだの、同じ社会の者とは思えない。

敵は、女戦士ばかりである。兵士は指導者と同じ性別だけになるので、爆乳女性が指導者のアッカドの兵は女ばかりとなる。

女相手なら楽勝、と思えるが、まったくそういうことはない。とにかく、女戦士たちは急所ばかり集中的に狙ってくるのだ。

金的金的金的、そればかり。金的を蹴って動きを止めたところを棍棒で頭を叩き割ったり、逆に股間を棍棒で叩き潰すなど平気でしてくる。



二、三人で群がって動きを止めて急所攻撃だの、捕虜を寄ってたかって玉潰しだのともう、文字通り狙い撃ちにしてくるのだ。

どうせ死んでも生き返るんだからいいだろう、というのが彼女らの意見である。

それを考えるたびに、ベテヴォはため息が出る。

——棍棒でキ○タマ叩き潰される痛みを全然考慮しないってなんなんだよなあいつら。自分に付いてないからって……もう、早く来てくれよ市長。

指導者水本は、いつのころからか市長と呼ばれるようになっていた。

別に「水本さま」でも「指導者」でもいいのだが、不自然な感じがして、誰かがうさぎ「市」の指導者なら「市長」だろうと思いついて呼ぶと、瞬く間に広まった。

うさぎ市が直接攻撃されたのを、奇跡的に撃退した後辺りだったとベテヴォは記憶する。

華々しい逆転劇だが、ベテヴォはちょっと複雑だった。

直前の大敗の時、彼は五百人の鯨戦士を率いる五番隊隊長として戦っていた。

負けて、山に逃げ込んで逃げ回っていた。

一緒に逃げ込んだ仲間たちが追っ手に捕まり、全裸にされて**去勢惨殺**される中、どうにか最後まで逃げ切った。

隊長のくせに、と文句を言うものも別にいない。

——まあ、死んでもどうせ生き返るんだからな、一々蒸し返すのもアレだよな、俺もその感覚わかる。でも、やっぱり俺としてはちょっと気にしちゃうよ。隊長が最後まで逃げまくるとか。奇跡の逆転劇に参加できないとか。

シミュレーション世界の人間ではあるが内面もあるし、判で押したような同じ存在ではない。

見た目も能力もばらつきがある。

ベテヴォが隊長に選ばれたのは強いからだ。

といっても、そんなにとびぬけて強くもない、順位的に上、という程度の話。

棍棒で殴り合う戦いでしかないので、隊長など誰でもいいから適当に選ばれたわけだ。

——もっとちゃんとした理由で選ばれたんなら、こんなに気にしない……いや、それならそれで「なのに活躍できなかった」ってなるか……ああ、逃げずに玉潰し食らっとけばよかったかな……でもキ〇タマだけは、キ〇タマだけは嫌なんだよ、あれだけは耐えらんねえよ……もうこんな女どもにキ〇タマばかり狙われる戦争は嫌だ。

思いつつも、指導者に任されればやるしかない。そういうふうには作られている。

小屋を出てきた一〇人の部下たちとともに、砦を出す。

周辺のパトロールだ。

インドア派の人間は地図で世界を認識し、地面の高さの人間が遠くまで見渡せる気がする。

しかし実際のところ、ちょっと高低差があるとすぐその先は見えなくなるものだ。

それを補うために丘の上にさらに見張り台を建てている。

そこに監視がいるにも関わらずパトロールが出る理由は、少し西側に行くと森があるからだ。

うさぎ市の西に敵国アッカド市はある。細い獣道を通り、森を抜けてお互いの軍勢は行き来している。いや、森を通らないルートもあり、普通はそちらを通る。

しかし奇襲するなら、森を抜けてくるだろう。

だから一様森の中を監視する必要があるのだ。

とはいえ、今日まで森を通して奇襲をかけてきた例はない。

「女ども、来るなら来い！」

ふざけ合う男たち。

パトロールなどなんとなく惰性でやっているだけだ。

まさか、今日に限って待ち伏せられているなどとは思ってもいない。

獣道が谷に差し掛かる。谷の左右から、斜めに細い木が傘をかけるように生えてきている。

その少しでも日光を得ようとして隙間に入り込んでいくような感じがベテヴォは好きだった。

谷の高さは、さほどではない。とはいえ、道具無しでは上がれない程度には高低差がある。

三メートルぐらいだろうか。出口は塞がれている。

塞ぐというか、女战士们が待ち構えているのだ。

そして入り口側にも、実は隠れていた。少し離れたところで見ている、入ったらひそかに後をつけ始めた。

谷の角を曲がると、出口の辺りに女战士们が立っているのに男たちは飛び上がる。

数が多い。

三〇人ぐらいはいた。

腰かけていた石などから立ち上がり、棍棒を肩に担ぎ、ニヤニヤし始める。

「やだ、いい男！」

「ちょっと遊んでいかない？」

「代金は……金のタマタマでいいよ？」



「ぎゃはははは！」

ぶっ殺します、睾丸集中攻撃していきます。

もう初めからそう宣言している女たち。

鯨棍棒を両手に持って振り上げ、じりじりと近づいてくる。

「うわ、ひっ」

「矢を撃てノッロロ！ 撃ち殺すんだよ！」

いわれるまでもなく、他の弓兵と違ってノッロロはすでに矢を番え、放っていた。

ギャッ、と叫んで女の一人が倒れる。顔面に矢が生えていた。

死にはしない。

死んではいないが、痛みで転げまわる。

顔面に木の棒が刺さって戦い続けられる人間は一部の英雄だけだろう。

普通の女性である女戦士は戦線離脱だ。

大した威力もない丸木弓だが、距離が近いので何とかなる。

弱い弱いといっても、動物を狩るのに使える程度の威力はあるのだ。

人間を殺すには十分である。

しっかりした甲冑など着ている相手にはほとんど無効だろうが、毛皮しか着ていない、盾も持たない相手なら十分な威力。

ただ、丸木弓兵は五人しかいない。

一様専門家だが、障害物もなく敵が近づいてきている状況では冷静に打ってられない。

加えて、脅し。

女戦士たちが目を血走らせて喚き散らす。

「野郎っ！」

「卑怯者はおキンキン潰しだよー、ほかの奴よりみっちりみっちり、おティンポもついでにいろいろしてやるからねー」

矢が届き始めると、小走りに変わる女たち。

「ひいいっ！」

威力の弱い丸木弓だけに、軽く素早く引き絞れる。

五張りの弓が弦を鳴らす。弦も木のツルだのツタだので、頼りないが人を殺すには十分。

石の矢じりが次々女に突き刺さる。

と、女戦士の一人、結構な巨乳女性が叫ぶ。

二ロマという、この待ち伏せ隊の隊長。

棍棒を振り上げる。

「突撃じゃあ！ キ〇タマ潰せ！」

「おおおおお！ 玉潰しじゃああ！」

「股間にぶら下げてるみっともないもん！ 除去してすっきりさせてやるからよおおおお！」

走って突っ込める突撃発起点まで大体長方形の陣形を保って小走りに進んで来ていた女たちが、一気に全速で走り出す。

それまでに、一〇人位が矢に当たり、五人ほど脱落していた。

残り二五人。

血を流した仲間たちに激怒し、目は大体男たちの顔を睨み付けながら地面を踏み鳴らして突進。ある程度の大きさの乳房はブルンブルンと激しく振動するが、もはや男らにそれを見て楽しむ余裕がない。

肉津波となった女戦士たちを受け止めるベテヴォたち十一人。

いや、受け止めない。

「逃げるんだああ！」

三倍の数で、陣形を保って突撃してきた相手を止めるのは難しい。

下がって、突撃の威力を殺すしかない。

衝撃力が最大の瞬間は長く続かない、だからこそ矢を受けつつ小走りで近づいてきたのだ。

それを見据え、ベテヴォは皆全体の隊長らしくいい判断をした……といえなくもない。

しかし実際のところは恐怖である。

——こえええ！ 止めらんねーし！ こんなん！ 無理っ！ 逃げるしかねえだろうがよ！ こいつらに殺されるだけまあ生き返るんだからならましも、この数の差じゃ絶対キ○タマ捌り殺しになる！ やだ！ 玉だけは嫌だ！

逃げるように叫んで踵を返しただけましである。

が、とっさのことでついていけない、というか聞こえなかった部下もいた。

「おらっしゃあああ！」

叫び、突っ込んでくる女戦士の頭に棍棒を振り下ろす男。

その棍棒に、女戦士が同じく棍棒を叩き付ける。

力では圧倒的に男が勝っている。しかし女戦士は体そのものの重さを乗せて、突進しつつの一撃だ。

跳ね返される棍棒、ゴン、と頭にぶつかる。

「ぎゃああああ！」

額、右目にサメの歯が突き刺さる、本当に凶悪な棍棒だ。これを股間に振り下ろしてくる女戦士たちは相当にやばいといえる。

その悲惨な状態の男に、別の女戦士がすれ違いざまに股間を棍棒でフルスイング。腹でもなんでも十分殺せるだろうに、あえて男の泣き所である股間を狙うドS女戦士。叩きつけ、振り抜く。

ぼちょ、というようなエグイ音とともに、血と肉片が飛び散る。サメの歯の一つに、丸い肉の塊が刺さっていた。引きちぎられた紐が血を垂らす。

「ぎゃははは、玉付き棍棒！」

笑いながら、突撃の勢いのままに走り抜ける女戦士。

他の女たちも、ほとんどが前に敵もなく、ただ抜ける。

それでは意味がない気がするが、そうでもない。横隊をもってある種の網をかけた感じである。

敵がいなかったものは偶然いなかっただけで、そちらに敵が逃げるなり動けば殴り倒す形になっただろう。

男たちの陣形が薄いので、すんなり女戦士たちは駆け抜ける形になる。

ただ、運が悪いものは一人、頭を狙った棍棒を食らってしまい即死する。

するが、そのまま突進、食らわせた男にぶつかってもろとも倒れる。

「野郎！」

「クソがっ！」

勢いよく突っ込んでくる死体に地面に突き飛ばされた男戦士が息を詰まらせ、立ち上がれない間に周囲を走り抜けた女戦士たちが走って戻る。

仲間の死体に飛び乗り、重りになる。

「おらっ！ もう動けないだろ！」

「さーて、生意気クソ野郎のおチンチ〇はさぞご立派なんでしょうね」

数人で群がり、足を開かせる。粗末な布の下着を剥ぎ取る。

紅潮した顔で覗き込む。

「あは、包茎」

「縮んでこれはまあ平均サイズね」

「ざんねーん、デ〇チンくんなら最後にお楽しみだったのにね」

巨根なら助けたのに一、という話なら **100%嘘**と見抜く男たちだが、最後のお楽しみぐらいならあるのかも、と思わないでもない。

が、まあ平均サイズならどのみち関係ない。

「ほんじゃ、去勢と行きますか」

「はいはい。でもその前に、一つ上の男にしてやろうよ」

「いいね」

「ひい、やめて……」

縮み上がり、親指ぐらいになった一物。その皮を摘まみ、引っ張る女戦士。

「ぎゃはは、伸びる伸びる！」

余裕である。

すでに、突撃で男たちは粉碎されていた。

すれ違いざまに股間をやられて悶死した者や、逃げようとして追いつかれ、頭を叩き割れたもの。

運がいい三人ほどだけが逃げていた——というか死んでも自国で新たに兵隊が生産されれば同じ人間として復活するからには、ここで楽に死んだ者も運がいいといえるだろう。

逃げ切れるならまあ、そちらのほうが一段幸運であることに間違いはないが……

半端に逃げ、捕まって去勢リンチならば、さっさと死んで復活したほうが得だろう。

丸木弓兵がノッロロともう一人、そして隊長ベテヴォの三人が逃げた。

残り七人のうち、三人が生きている。

生きているが、もう押さえ込まれていた。

押さええている者の余裕はすでに戦いが実質終了していることからくる。

二五人中、一〇人ほどが追っていく。

前にも味方がいることはわかっているが、そちらに追い込みたいという気持ち。

いや、もっと大きい思いがある。

胸は普通の大きさと、美人といえる顔立ちの女戦士サロニャが先頭を走る。

棍棒を肩に走りつつ、前を走る男三人に叫ぶ。

「待ちなさい！ おとなしくしたら、逃がしてあげるから！」

——もちろん嘘ぴょーん、うさぎ市の生意気な腐れチンチ〇君たちのタマタマ潰す機会は逃さないわ。放っておいても仲間が捕まえるだろうけど、私の手でタ〇キン潰してやりたいから何とか捕まえたいわね。

「情報話したら、逃がしてあげるから！」

——別にそんなもんいらんというか、まあ聞くだけ聞くとしても、終わった後で逃がしてやる必要ないけどね。

走る三人。武器を捨てたので、女たちより身軽だ。

ベテヴォがちょっと振り返る。

——話せば助かる！？　じゃあ助かっちゃおうかな？　って、言うわけねえだろうが。絶対キ○タマ潰しに決まってる、逃げ切らないと、助からねーんだよ！

と、前のほうから足音。

「え？」

バラバラと、女戦士が姿を見せる。

「はい、おしまーい」

「えー、何がお終いな？　わかんない」

「あは、そりゃもちろん……」

パン、と自分の股間を叩く女戦士。

「この辺、完全終了」

「やべ、やべ……」

前に一〇人、後ろに一〇人。

自分たちは武器無しで三人。

勝てるわけがない。

「ま、待ってくれ！　話す、何でも話すから！」

「もういいんで。っていうか情報が意味持つレベルの戦争じゃないし」

じりじり、と距離を詰める女たち。

唾をのむ。ちらちらと、股間を見られているのがわかる。

「た、頼む……」

「頼む頼むって、棒立ちジャン」

「男だけに棒立ち」

「すぐ立つもの没収してやるからよ」

「は、は……頼む」

地面に膝をつく。

「お、土下座ですか」

「普通の格好で？　服着て土下座って土下座なのかな？」

「あ、ああ」

慌てて立ち、服を脱ぐ。

下着姿。チラ、と周りを見る。

首を傾げ、ニヤニヤ笑う女戦士たち。

ノッロロともう一人も同じ格好で顔を赤らめている。が、恥ずかしがってどうにかなる状況ではなかった。

——畜生、脱ぐしかない。

「お、下着も脱ぐんだ」

「これは結構本気で頼んでんじゃね？」

「ぎやはは、何あのチ○ポ！ 三本ともクソ小せえよ！」

「特にあれ、極小じゃん！」

ベテヴォの縮んだ一物を指さす女たち、唾を飛ばして笑う。

「玉袋に埋もれてるんですけど！」

「チ○ポ摘まんで見せろよ。それで……」

一人が近づいてきて、耳打ちする。

「そ、そんなこと……」

「嫌ならそれ、磨り潰しちゃうよ？」

「い、言います！」

震えながら、一物を摘まむベテヴォ。足を開き、腰を突き出す。

「ご、極小チ○ポクソチ○ポ、見てください！ これが皆さんに逆らった腐れキ○タマのぶら下げてる自慢のチ○ポです！」

手を叩き、爆笑する女戦士たち。

「ちょっと、悲惨ねえ！」

「突き出しても小さいもんは小さいのよ！」

「小指三本ね」



「み、皆さんにタマタマを攻撃されると思っただけでこんなに男の証が縮み上がってしまいます！ タマタマだけは許してください！ 男はタマタマを女性に軽く攻撃されただけで地獄に落ちてしまう弱い生き物なんです！ 女性の皆様、タマタマを狙われると我々男はどうしようもないクソザコなので、どうかタマタマだけはお許しを！」

同じようなことを、三人で叫ぶ。

笑い転げる女戦士たち。

涙を流すものもいた。

が、それ以上に、ドSの女たちは情けない男の姿に、下着の中で雌蜜を流していた。

「いや、笑った！ 笑わせてもらった！」

「そ、それじゃ……はうっ！」

ばし、と軽い爪先蹴りで陰嚢を押し上げられる。腰を引き、唇をしゃちほこのようにするベテヴォ。

「おおおおお」

「大げさ、軽く蹴っただけだよ」

「そうそう、こんなふうに」

「やめ……」

「おら、防ぐんじゃねーよ短小！」

ノッロロの背後に回る別の女。羽交い絞めにして腰を突き出させる。

無防備な股間に膝蹴り。

「キーン！」

「はぎっ！」

いや、当てていない寸止めだ。

止めてから、ゆっくりと足を上げて行く。女の膝がノッロロの太ももを擦り、グニュッと縮んだ肉袋を持ち上げ、押し潰す。

「**当ててないのに痛がる**とか、ほんとここだけはザコよねー、ザコザコ、ザコキ〇タマ。うりうり」

「はひいいい」

女の膝でゴリゴリと男性器を磨り潰され、のたうつノッロロ。痛いことは痛いだが、下手に押されて潰れる恐怖が巨大だ。

「はひっ、やめ、潰れ……」

「こんなんでも潰れないって！」

玉を追い込まれるのを、横で股間を押さえてみているしかないベテヴォ。

最後の一人が、叫ぶ。

「おおおおっ！」

丸木弓兵ミボロ。竿こそ小さいが、巨玉で気の荒い男だった。

「ふざけんな女ども！ 女のくせによ！」

「へえ、そんな事言うんだ」

「そんな根性ある男性様が、さっきあんなこと言ってたんだ？」

「そ、それは……」

顔を赤くするミボロ。

それでも怯まない。

拳を握り、女の一人に殴りかかる。

「ぶっ殺してやる！」

「このっ！」

棍棒を袈裟掛けに振る女戦士。しかし、武器どころか全裸のミボロは素早くかわし、踏み込んでフックで頬を殴りつける。

「きゃああ！」

「あ、こいつ女の顔を！」

「キ○タマもない出来損ないに負けるかよ！」

「この野郎！」

「やっちまえ！」

周りを囲む女たち。このまま棍棒で一挙に殴り殺しか。

それはそれで、楽かもしれないと思う見ているだけのベテヴォ。

と、美人が進み出る。

サロニャ。

「強いジャン。全裸でそんなに根性見せられるなんて……負けたよ、逃げていい」

「な、マジか？ はふっ！」

棍棒を突き出される。股間に。

へこっ、と腰を引き、何とか回避する。

しかし、そんな体勢では次の動きに移れない。

「嘘ぴょーん」

サロニャは、あらかじめ指示していた一人に目くばせする。

背後に素早く回っていた素手の女戦士が腰にしがみつき、ギュッと握る。まず巨玉の根元を。そして下に向けて絞るように玉も圧迫。

「はう！」

逃げ場無し。手慣れている。

「ぎやはっはは！ はうっ！」

「はうっ！ はうっ！ キンキンが！」

玉を握られたら男は終わりと知り尽くしている女たちが手を叩き、股間を押さえて口をしゃちほこにしたりして間抜けな声を上げて見せる。

金的嘲笑に反応する間もなく、棒立ちのミボロに攻撃が続く。玉を握りしめられてろくに動けないが、それでも防御しようとする手を空いた女が左右から掴み、完全に無防備にされる。

握っている女が、攻撃を続ける。

「はい玉握り。からのー」

腰にしがみつき、股間を横から覗きつつ、片手は玉握り。もう片手には、鯨の歯を使った小さなナイフ。

見下ろして、震えるミボロ。

「あっ」

「うふふ、これは食べ物などを料理したり、道具を作ったりとまあ万能の器具で……」

「ちょ、やめあああああああ！」

「女馬鹿にして、顔殴るようなクソ野郎のね、ペ○スカットにも使えるのよ。チンチ○ちゃん切り器」

根元に押し付け、スコスコと前後に動かす。鋸のような歯の表面が一物の皮に刺さり、ズタズタの傷を作りながら傷を広げていく。

「あぐおおおおおお！ おんんごおおおお！」

——やめ、いてえええ！ チ○コ取れる！ チ○コがああああ！ やめて、やめてくださいお願い！ そこだけはやめて！ チンチ○がなくなる、チンチ○がなくなる、お終い……全部お終いだからやめてっ……

「あぎゃあああがあああああ！ やめえええええ！」

「大げさ！ 男ってここ周辺クソ大げさ！」

「そんな小さいもん切ったほうがいいって」

「そうそう、「デカかったんだけど」って言えるじゃん」

「っていうか待ってりやまた生えるんだし」

「ま、殺すんですけどね」

「でも生き返るんだから。チンチ○もタマタマも再生で、万事オッケーという理屈」

「小さくて切りにくいなあ」

「引っ張るよ。いたた、男の癖に女の子を殴りやがってこいつ……絶対チ○コ切ってやるからな」

「サンキュー。お、切れる切れる。おチンチ○、すでに半ば以上切れました」

「泡吹いてるよこいつ」

「おら、よく見ろよ。お前が馬鹿にした女ごときに、男性様のシンボルちょん切られるところ。おチンピー切られるところ」

ビンタで無理やり意識を戻されるミボロ。

「ひiiiiiiii、やめ」

「取れた！」

殴られた女が引っ張ると、僅かに残っていた部分がブチリと切れ、ミボロが男性のシンボルを完全に失う。

「ひぎiiiiiiii！」

涙と鼻水を流す竿無し男の前に集まる女たち。

集まり、股間を指さして嘲笑する。

「やーい、チンなしチンなし！」

「見て見て、この人チンチ○ないよ！」

「えー、嘘よ、そんな男の人いるわけじゃない！」

「いや、見てよ」

「んー、あらああ！ 本当！ おチン○ンないじゃないこの人！」

「HP一桁になってるよ！」

シミュレーションの世界なので、そういう数字を見ることができる。

「チ○コ切られただけでそれってバランスおかしくね？」

「ビンタ何回かでもう死んじゃうね」

「おおおおお」

震え、汗を噴出させるミボロ。

一物を切断され、根元が縮みあがったのか不思議に大して血は出ない。

それを指さし、女たちは「血のションベンだ」とまた笑う。

「一思いに玉握り潰して殺してあげなよ」

一思いに首切って……などといわないドS女子たち。

「それじゃ」

「やめて！」

「チ○ポ無くして玉だけあっても仕方ないでしょ。チ○ポ切り取られて、生きてても仕方ないでしょ。そらー、ぎゅー、キ○タマ握りいい」

「ぎょおおおおお！ あっ」

ガクッ、とミボロの膝が砕ける。

「はいHPゼロー」

「おチンチ○をちょん切られ、タマタマを握りられて死亡ー」

「ぎゃはははは！ 悲惨な死に方ねえ！ っていうか玉潰れてないでしょまだ」

「握っただけでダメージが溜まり、死んじやいました」

「チン切りのダメージがデカすぎたのね」

「チ○ポは小さいのにね！」

げらげら笑いまくる女たち。

頬を引きつらせ、立ち尽くすしかないベテヴォとノッロロ。

と、急に女たちが笑うのをやめる。

「さーてと、だらだらやっても仕方ねーし」

「キ○タマ潰して処刑して帰るか」

「いや、今日は大漁だったわ」

すでに縮み上がったベテヴォの股間がさらに縮み上がる。

——待ってくれよ……なんだこの撤収ムード。やめてくれよ。撤収するなら「もう逃がしてやるか」とか、何とかならねえのかよ……あ。

突き飛ばされる。

ノッロロもだ。

足をつかまれ、開かれる。手も引っ張られ、裸の背中に土や石を感じつつ、女たちを見上げる。

無防備に開かれた足の間に立つ女戦士。棍棒を振りあげる。

涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにするベテヴォ。

「あああああああああ！ お願いしますううう！ ぐむっ！」

どちゃ、と肉を耕す音。丸出しの男性器に突き刺さる鯨の牙。

「去勢処刑は、あまり力入れないのがコツ。深く刺さないでも、十分男は終わりだから」

軽く振り上げ、何度か振り下ろす。

唇を噛み、白目を剥いて痙攣する二人の男。

周りの女たちは、別に盛り上がりもしない。放り出した棍棒を拾い、帰り支度だ。

手足を抑える女たちも、もう作業顔。

——な、なんなんだよこいつら、喜ぶか、せめて俺への憎しみ……怒り……何か見せろよ。ゴミ掃除じゃねえ……俺の玉も竿もゴミじゃねえぞ……

何度目かの振り下ろしで、二人のHPがゼロになる。

それを見た処刑役は一つうなづくと、棍棒を持ち上げる。

刺さった肉片の中に血まみれの楕円形の球体、睾丸があるのに気づくが、何も言わずに指で弾き落とす。

戦いで疲れたとか、十分楽しんだとか、パトロール部隊を見に仲間が来るかもとか、理由はともかく、全裸で股間を血まみれにした男三人の死体を放置し、さっさと引き上げていく女战士们。

「あースカッとしたわ」

「待ち伏せしてよかったね」

「しばらくしたらまたやろう」

「キ○タマ狩りじゃ！」

「こうやって数減らしたら、砦攻撃するのも楽になるかもだし」

「何より楽しいしね」

「砦落とせば、もっと捕虜をねっとり時間かけてキンキン潰しできるのにね。ここじゃ援軍来たらめんどくせーから、時間そんなにかけれないもんね」

「そうだ、あの二人、私らの砦まで拉致って行けばよかったんじゃない？」

「それはめんどくせーでしょ、たかがキ○タマのために」

「あは、そりゃ言えてるわ」

「あんなもんスナック位の価値しかないって」

「玉、やすっ！」

和気藹々。お互い後遺症なども残らないし、死んでも生き返るという事実が女たちを深刻にさせない。

治り、蘇生するとはいえ痛いことは知っている。

しかし、彼女らには「股間をミンチにされる男が地獄の苦しみを味わうかも……」という想像はあまり働かない。何せ「ついてない」のだから。

体験版終わり

この後、生き返ったベテヴォたちは砦にとんぼ返り……

……の途中で同じ国の女たちに女性蔑視発言を聞かれて金的を蹴られまくり

砦に攻めてきた女战士们に金潰しを食らい、

捕虜になって吊るされ、玉を袋から出されて引き抜かれたりと去勢惨殺の限りを尽くされます

ぜひ製品版もお楽しみください